小説

教育者

第二部　村落校長記

小説 教育者

添田知道

第二部　村落校長記

370 (NDC)

添田知道
小説 教育者 第二部
玉川大学出版部 1978
316pp. 19cm

添田知道 SOEDA Tomomiti
1902年，東京生れ。1916年日本大学中学校中卒。売文社勤務。演歌作詞作曲演奏を経て，1927年より文筆生活に入る。
著書に本書『小説教育者』（新潮賞）ほか，『利根川随歩』『演歌の明治大正史』（毎日出版文化賞），『朝風街道』『ノンキ節ものがたり』『香具師の生活』『春歌拾遺考』等がある。
現住所 東京都大田区東馬込2—7—12

小説 教育者 第二部

1978年6月10日 第1刷発行 ©
1978年6月25日 第2刷発行

著 者 添田知道
発行者 小原哲郎
発行所 玉川大学出版部
〒194 東京都町田市玉川学
電話 0427-32-9111
振替 東京 8-26665番
印刷・製本 (株)図書印刷

乱丁本・落丁本はお取替いたします

(分) 1037 (製) 16012 (出) 4355

小説　教育者　第二部　村落校長記

目　次

第一章　相模野台地……11
原町田……12
憎まれ……19
政争圏……26
飯と魚……29
第二章　黄　塵……35
壮　士……36
学校日誌……39
道しるべ……43
半風子……47
信　認……49
導火線……55
先生の莫迦……59

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三章　南　村……63
焦　躁……64
片輪の村……68
町谷ノ原……75
孤　燈……79
此の一人……83
第四章　開朦学校……89
南村の顔……90
千石村……92
教育の外……96
学校の子……102
善波峠……110
春　兆……115

第五章　村の感情……121
赤い土釜……122
落第……124
髯……123
教育の敵……131
かなめ垣……137
乞食学問……140
第六章　禍……149
瓦解……150
花匂ふ……156
盃……160
簑笠先生……165
風騒ぐ……172

第七章　教師の妻……179
重態……180
政子……183
村の雇人……190
葡萄酒……195
境橋……201
木の香……205
第八章　擾雲……211
女教員……212
鶴間壮士……216
死神……222
早鐘……226
治安……234

おどびん……237
第九章　痩せた土……241
時の氏神……242
原始の営み……246
背のび……252
風伯……258
学校公売問答書……262
第十章　聯隊旗……273
高飛車……274
ぐらつき……277
煮沸水……282
陣地……286
光栄……293

教師の精神……298
機　縁……303
惣太郎……308

装画・畦地梅太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二部　村落校長記

第一章　相模野台地

原町田

八王子から御殿峠を越えて相原に出ると、明るくひろがる高原の向うに、山襞も鮮かに大山丹沢の山塊がぐっと迫って来る。——相模原の北端に出たのである。

——甲州から来る桂川が、丹沢裏をくゞり抜けた道志川を合はせて相模川となり、次第にこの原地の中央に寄って南下し、やがてそれは馬入川となって相模灘に入るのであるが、これと略二里の間隔を保つ並行型で、末は片瀬川となる境川が、相模原と南多摩丘陵地帯とを劃ってゐるのであった。

相原から橋本の宿に入らうとするところに架けられた小さな木橋が、両国橋と呼ばれてゐるのが如何にも大仰なをかしさであったが、思ひ切って跳べは跳び越せさうにも見える小流が、境川の名を得てゐるといふのは、それが武相の国境をなすところからであった。

一望の高原には、もえ立つやうな青の桑畑が、さわさわと相模川の河原と覚ゆるあたりまでのびひろがって行くのであった。その青い桑波が相模川の河原に尽きたところからのし上げた大山丹沢の秀抜を、右に望みながら、原町田への往還は、境川沿ひに、南多摩丘陵の裾を繞って行くのである。

梅雨時ではあったが空は明るく、時折の小雨も夏のそれを思はせるやうな道中であった。坂本龍之輔は小倉の袴と着替の一枚、二三の書をくるくると唐縮緬の風呂敷にくるんで首にかけた無造作ないでたちであった。眼の前がひらけたやうに、龍之輔の心も明るく軽かった。

——行手にひろい海が感じられる。

思へば胸を圧しつぶされるやうな谷間の生活であった。足かけ三年の未開な辺境に於ける教師生活は、身をすり減らすやうな苦闘の連続に、息せく隙もなかったのであった。

因循固陋の岩盤を切りひらく、それは建設の基礎工事であった。谷間にあった龍之輔にすれば、それはたゞ無我夢中の驀進であったばかりだが、その地を離れて顧みると、かへってその仕事の意味がはっきりとうかんで来るのである。道を拓いたのであった。あれだけやっておけば、必ずやレールは敷かれ、あの暗い谷間にやがて新

しい文教の資の流れ込む日が近くやって来るに違ひない。さう思へば、今彼には悔いがなかった。

教壇に倒れた龍之輔が、割れるやうにいたむ蒼い額を抑へながら、故家に辿り着いて七日間、休養をとる暇にも、早くも彼の心は前方にのり出して来るのであった。すると、次第に彼の心は明るんで来た。再出発に首を擡げる若いこゝろである。——時を無駄にしてはならぬ。

早く鎌倉へ行かう。——母校に再入学を願ふのだ。山奥の、学校ともいはれぬ学校に、実務に就いて、彼には新しい教授上の疑問が生じてゐた。授けられた教授理論では、割り切れぬ体験を土台に、勉強のし直しをするのだ。海辺にあれば自づから疲れた身体は養はれて来るだらう。その上で、新しい仕事に就いて立ち直るのだ。彼はその思ひを、原町田にゐる盟友三人組の大久保末吉に語らって行かうといふのであった。

稍駅場めいた木曽を越すともう原町田へは一里であったが、再び人家は絶えて道は櫟林の中に入って行った。林は、踏み込んでゆく顔が青くうつらふやうな明るさであった。音もなく小雨がかゝって来た。すると、側面の木むらがごそりと鳴ったと思ふと、

「待て、」

一人の警官が道なかに立って、彼を遮った。傘もさゝず、穴のあいた帽子を冠った着流しの小男の黒い眼鏡も一層に怪しみを買ふべきものであったのだらう。彼は在学時代から傘を用ひなかった。スパルタ教育の学校ではそれが許されなかったのだ。休暇に故家から学校に戻る雨もよひの朝など、母が出してくれる傘を断るにも忍ばれず、持っては出ても学校へは持ち込めぬその情の傘を、見知りの茶店にあづけて来るといったやうな習慣がすっかり身についてゐたのである。

彼は問はれるまゝに答へた。風呂敷包に不審を打った警官はどうでもひろげて見せろと言った。

「私は教育者です。今申した言葉に詐りはありません。たって御不審とならば、御自由にお調べ下さい。」

首からはづした包をさし出した。警官はそれを道に置いてひろげはじめた。衣類の上に紙包がのってゐた。

「これはなんだ、これは、」

あまりの血相に、思はず彼は苦笑をうかべてゐた。

「なに、バカらしいものですよ。」

警官は紙包にかけた手をすっと引いて、

「――あけて見せろ。」
「いや、あなたがあけかけたのだからあなたがおあけになったらいゝでせう。」
ひきつった顔で、警官はきかなかった。仕方なく彼はそれをひろげた。弁当代りに途中で買って来た串団子であった。種も仕掛けもないといふやうに、彼はそれを一本々々手にかざして見せた。警官はそれをぐっと睨んでゐたかと思ふと、くるりと背を向けた。
「待て、警官殿、」
振りかへりもせぬ早足となった。
「――あなたがひろげたものです。始末をして行ってくれんといふのは困ります。」
警官は樅林の冴えた緑の葉蔭にかくれて行ってしまった。彼はひろげられたものを包み直さうとしたが、そのまゝそこに腰を下ろし、団子をつまみ上げてしばし瞶め、やがてそれを喰ひ出した。彼には警官の血相がわからなかった。なんで自分が不審を買はなければならなかったのか、わからなかった。――それが、彼の踏み込んだ相模原で、彼を待ち設けてゐた運命を暗示してゐたのだといふことには思ひも及ばなかったのである。

――中央では、松方内閣にあって内務大臣であった品川弥二郎が、激浪の如く政府に襲ひかゝる民党勢力の防遏を策し、第二議会を解散に導き、続いて選挙干渉の挙に出た。此の訓令に地方官憲は白昼剣を鳴らしてその服命に奔馳した。これに煽られて弥々鉄拳は躍り、刀は閃き銃は鳴って家を焼き人を殺める壮士の狼藉は全国に展開され、中にも東京、大阪、熊本、佐賀、富山、石川、高知、鹿児島は最も激甚であった。予戒令の発布に遊手無頼の壮士を取締るを名として実は民党の壮士を拘束し、吏党の壮士をして思ふまゝに運動せしめるが如き観があった。民党の意気凄しい高知の如きでは、投票函を奪取されたといふやうな奇怪事まで起こったのは此の時であった。此の総選挙は全国を通じて死者二十五名、負傷者三百八十八名を出す騒ぎであったが、しかも結果は依然民党の優勢であった。民党の反撃形勢は不穏を孕んでゐた。こゝに於て農商務にあった陸奥宗光は、内閣の鞏固を計り、政務官と事務官との区別を明らかにし、選挙干渉に関する処分を下すべしと主張した。干渉の証跡あるものを検挙処分し、民党の激昂を抑へ、第三議会の紛擾を防がんといふのであった。閣外にあっても、枢密院議長伊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com